

# Marshall, Schumpeter, and Social Science

## 一橋大学附属図書館企画展示

# マーシャルとシュンペーターの遺産

新古典派を代表するアルフレッド・マーシャル(1842-1924)、近代経済学の国際的巨匠ヨーゼフ・シュンペーター(1883-1950)、このふたりに関する国際ワークショップ「マーシャルとシュンペーターの遺産：Marshall, Schumpeter, and Social Science」が、平成19(2007)年3月17日(土)～19日(月)、本学の佐野書院において、海外から関係研究者10名を招聘し、経済研究所主催により開催されます(平成18年度大学戦略推進経費採択事業)。附属図書館では、このワークショップに協賛し、所蔵コレクションからシュンペーターの旧蔵資料や速記メモなどを中心とした企画展示と講演会を開催します。



今回の展示では、東京商科大学(現・一橋大学)を皮切りに各地で講演をおこなったシュンペーターの1931年の来日、シュンペーターと日本の研究者との交流、「シュムペーター文庫」寄贈の経緯、マーシャルとシュンペーターの日本における受容史などをとりあげ、各種の原典資料を展覧します。

◀ 1931(昭和6)年1月28日(水)  
兼松講堂前にて  
シュンペーター(前列中央)と  
中山伊知郎(向かって右隣)、  
東畑精一(前列向かって左端)

### 附属図書館企画展示

日程：2007年3月14日(水)～28日(水)  
(土・日曜日・祝日は休業)

時間：9:30～16:30 (閉室17:00)  
(入場無料)

会場：附属図書館 公開展示室  
(西キャンパス・時計台棟1階)

### 講演会

講師：塩野谷祐一  
(一橋大学名誉教授、元学長)

演題：シュンペーターの野心  
～その人生と学問～

日時：2007年3月20日(火) 14:00～15:30  
(事前申込不要、入場無料)

会場：マーキュリーホール  
(東キャンパス・マーキュリータワー7階)

### 〔※問合せ先〕

○国際ワークショップについて：経済研究所教授・西澤保 [nisizawa@ier.hit-u.ac.jp](mailto:nisizawa@ier.hit-u.ac.jp)

○附属図書館企画展示および講演会について：学術情報課 学術・企画担当

Tel: 042-580-8229

[lib-kikaku@ad.hit-u.ac.jp](mailto:lib-kikaku@ad.hit-u.ac.jp)

# Biographical Summaries



## アルフレッド・マーシャル Alfred Marshall (1842.7.26-1924.7.13)

マーシャルは、1890年に主著『経済学原理』を公刊して当時の経済学界に大きな影響を与えた(「自然は飛躍せず(natura non facit saltum)」「部分均衡分析」「時間の要素」など)。また、スミス、リカード、ミルなどの古典派経済学の伝統を吸収する一方、クールノーやチェーネンから数学的方法を学び、限界革命に沿った仕事を手がけた(需要と供給の均衡)。さらに、チャールズ・ダーウィンの進化論やハーバート・スペンサーの社会進化論から影響を受けたり、ヘーゲルの有機的社会観を学ぶためにドイツに渡ったりもした。

- 1842年 7月26日、ロンドン郊外のバーモンジイ(Bermondsey)で、銀行員の子として生まれる。
- 1865年 ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジのフェローに採用される。  
友人の薦めでミルを読んだ後、いくつかの都市の貧困街を訪れたとき、ヴィクトリア朝の繁栄の陰に隠された貧困の実態を目の当たりにして経済学研究に一生を捧げることになる。
- 1877年 メアリー・ペイリー(Mary Paley)と結婚したが、フェローの独身規定のためその地位を失い、ブリストルに新設のユニヴァーシティー・カレッジ学長に転職。
- 1879年 メアリーとの共著『産業経済学』The economics of industry を著し経済学における確固たる地位を築く。
- 1883年 アーノルド・トインビーの後任としてオックスフォード大学ベリオル・カレッジに招聘。
- 1885年 ヘンリー・フォーセットの後任としてケンブリッジ大学経済学教授に呼び戻され、2月24日に就任講演「経済学の現状(The present position of economics)」(その末尾で「冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心をもって(cool heads but warm hearts)」という表現を用いる)。
- 1890年 『経済学原理』 Principles of economics 刊行。
- 1908年 高弟ビグーに教授職を譲り、ケンブリッジ大学を退職。
- 1919年 『産業と商業』 Industry and trade 刊行。
- 1924年 7月13日死去(享年81歳)。

## ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター Joseph Alois Schumpeter (1883.2.8-1950.1.8)

- 1883年 2月8日 オーストリア=ハンガリー帝国、モラヴィア地方(チェコ東部)のトリーシュ(Triesch、チェコ語名チェスチュ Třešť)に織物工場主の子として生まれる。
- 1906年 2月、法学博士の学位を取得しウィーン大学法学部を卒業。秋、イギリスへ渡る。
- 1908年 『理論経済学の本質と主要内容』 Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie 刊行。
- 1909-1911年 チェルノヴィッツ大学教授。
- 1911年 11月、グラーツ大学法学部教授に就任。
- 1912年 『経済発展の理論』 Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung 刊行。
- 1919年 3月15日、オーストリア共和国の大蔵大臣に就任したが、10月17日辞職。
- 1921年 ビーダーマン銀行の頭取に就任。当初ビジネスは順調だったが、1924年倒産し巨額の負債を個人で負う。
- 1927-1928年、1930年 ハーヴァード大学に客員教授として出講。
- 1931年 (47-48歳) 来日し東京商科大学、東京帝国大学、神戸商業大学ほかで講演。
- 1932年 9月、ボン大学の教授を辞任して渡米、ハーヴァード大学の教授に就任。
- 1939年 『景気循環論』 Business cycles 刊行。
- 1940-1941年 計量経済学会(Econometric Society)会長。
- 1942年 『資本主義・社会主義・民主主義』 Capitalism, socialism, and democracy 刊行。
- 1948年 アメリカ経済学会(American Economic Association)会長。
- 1950年 1月8日早朝、睡眠中に脳溢血で死亡(享年66歳)。
- 1954年 『経済分析の歴史』 History of economic analysis 刊行。



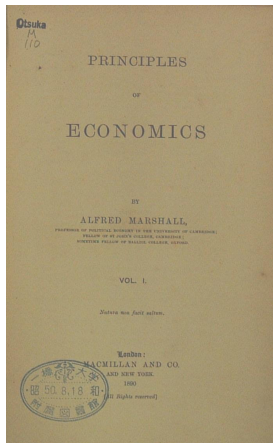
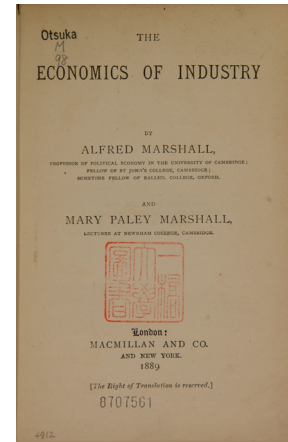
# Works of Marshall

## マーシャルの主要著作

### ● 『産業経済学』 —最初の体系的著作—

#### The economics of industry (1879)

本文 230 ページ程度の小著ながら、2 年以上の構想を経て著されたマーシャルの最初の体系的著作である。メアリー夫人との共著だが、ほとんどマーシャルによって書かれた。第 1 編「土地、労働および資本」、第 2 編「正常価値」、第 3 編「市場価値」の 3 編から構成されているが、この著作に込められたマーシャルの意図は、J.S.ミルの『経済学原理』に沿いつつも、より明白な需給均衡論として価値論を展開することにあった。この書の大部分は、貨幣の購買力が不変であるという条件下での収穫逓増現象を扱っている。第 3 編の最初の章では景気循環論が展開されている。人々の強気が財需要に影響を与えてそれが銀行信用の拡大を生み出す。投資が投機的水準まで拡大すると危険を察知した銀行が貸し出し利率を引き上げ始める。投機業者の債務不履行が連鎖的に他の倒産を招き、信頼によって拡大した経済は不信によって急激に縮小していき多くの不良債権が発生する、といった貨幣的要因による循環現象の分析を行っている。この出版によって、マーシャルは J.S.ミル亡き後のイギリス経済学を代表する人物としての評価を固める。なお第 2 版は 1881 年に出版されたが、『経済学原理』(1890)の出版後、絶版とした。



### ● 『経済学原理』 —ケンブリッジ学派の教科書—

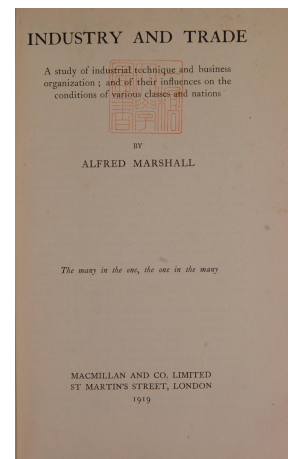
#### Principles of economics (1890)

衰退していた古典派経済学の諸理論を、数学的限界概念と時間概念および進化論的思想を盛り込んだ新しい枠組みの中で再評価する一方、歴史学派の主張にも目配りした本書は、ケンブリッジ学派経済学（新古典派経済学）の核として重要な影響を与えた。第 8 版(1920)まで版を重ねるが、本書の権威は揺らぐことなく、ケンブリッジ大学では長きにわたり、卒業資格認定試験受験に必読の書といわれていた。その最大の理論的貢献は、消費者行動と企業者行動を「他の条件が一定である (ceteris paribus)」といった厳密な条件下、つまり後に「部分均衡分析」とよばれる条件下で「限界原理」を用いて説明したことである。本書を通じて「限界効用」という用語が一般的になった。

### ● 『産業と商業』 —晩年の代表作—

#### Industry and trade (1919)

副題は “a study of industrial technique and business organization ; and of their influences on the conditions of various classes and nations (産業技術と企業組織についての、およびそれらが諸階級・諸国民の境遇におよぼす影響についての研究)”。晩年のもうひとつの主要著作『貨幣信用貿易』 Money credit & commerce (1923) とともに、“trade” が「貿易」なのか「商業」なのか、“commerce” が「商業」か「貿易」かをめぐって、さまざまな解釈が日本では論じられてきた。



# Acceptance of Marshall in Japan

## 日本におけるマーシャル受容史

マーシャルは生涯、「進歩と理想」を考え未完の断片的な大部の草稿を残して没した。『経済学原理』は彼の社会科学・経済学構想の一部であり、『産業と商業』もそれに続く一部であった。マーシャルの「進歩と理想」の構想にはシュンペーターと共通のものがある。経済静学から動学に進み『経済発展の理論』を著したシュンペーターは、その後は歴史的、社会学的視点から経済社会を見ようとし、やがて『資本主義・社会主義・民主主義』にまとまる経済社会学に思索を向けた。

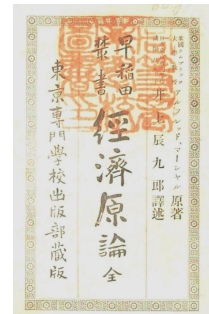


### ● 『勤業理財学』 —マーシャルの邦訳書の嚆矢—

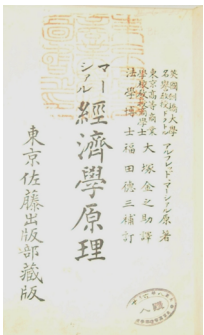
高橋是清が当時の文部省の翻訳局長であった西村茂樹の薦めに従って、マーシャル夫妻の *The economics of industry* (1879)の翻訳を開始し(実際の翻訳は学生に作業させた(上塚司編『高橋是清自伝』上巻 中公文庫))、文部省編輯局から1886(明治 19)年に出版。この邦訳書がマーシャルの経済学と日本との最初の出会いであろう。書名はしばしば誤って『勤業理財学』として引用されるが、『勤業理財学』が正しい。

### ● 『経済原論』井上辰九郎訳 —大正時代まで重版されたベストセラー—

*Elements of economics of industry* (1892)を井上辰九郎が翻訳した本書によって、マーシャルの経済学の日本への本格的な導入が開始された。1894(明治 27)年、東京専門学校(早稲田大学の前身)の講義録として製作された『経済原論』は、1896(明治 29)年同校出版部から出版され、ベストセラーとなり大正時代まで重版された。



### ● 『経済学原理』大塚金之助訳 —完訳までには紆余曲折—



マーシャルの主著 *Principles of economics* (1890)は、慶應義塾大学で気賀勘重・堀切善兵衛・福田徳三による並行授業の教科書として1905-1906(明治 38-39)年に使用された。ところで、吉田与三郎は邦訳を計画し、1910(明治 43)年にマーシャルの許可を得た。他方、東京高等商業学校(一橋大学の前身)助手の大塚金之助は、福田徳三の指導の下に翻訳し、1919(大正 8)年に『経済学原理』として出版したが、これは原書第7版の第5編の大部分を欠く部分訳だった。また、吉田がより早くから翻訳に着手していたためマーシャルは他の日本人に一切邦訳の許可を与えなかった。大塚は出版の許可を得られないまま5年間の海外留学に旅立ったが、帰国後の1924(大正 13)年、マーシャルの突然の訃報に接し、吉田の許可を得て夫人に連絡をとり、ついに翻訳出版を快諾された(『大塚金之助著作集』第1巻「わが道」)。

原書第8版に基づく大塚訳『経済学原理』は1925-1926(大正 14-15)年に分冊刊行され、これを以て初めて完訳が実現した。

### ◎参考文献

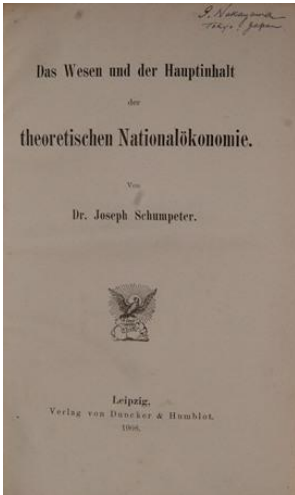
- 井上琢智「マーシャル経済学の日本への導入」. 井上琢智, 坂口正志編著『マーシャルと同時代の経済学』京都: ミネルヴァ書房, 1993.6 (マーシャル経済学研究叢書; 2), p.211-229; 第9章
- 橋本昭一編著『マーシャル経済学』初版第2刷. 京都: ミネルヴァ書房, 1991.12 (マーシャル経済学研究叢書; 1)
- 橋本昭一「マーシャル」. 経済学史学会編『経済思想史辞典』東京: 丸善, 2000, p.377-379
- 美濃口武雄『アルフレッド・マーシャルとケンブリッジ学派の経済学』国立: 一橋大学社会科学古典資料センター, 1992.3 (一橋大学社会科学古典資料センター Study series; no.26)

# Works of Schumpeter

## シュンペーターの主要著作

- 『理論経済学の本質と主要内容』 —理論と政策を峻別した純粋経済学—

### Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie (1908)



参考文献も十分に揃っていないエジプトのカイロで弁護士として働く傍ら短期間に執筆し、25歳の若さで刊行したデビュー作。序文は、知的探求を身上とした彼の生活態度を象徴する「すべてを理解することは、すべてをゆるすことである(alles verstehen heißt alles verzeihen)」ということわざで始まる。ドイツ語圏の読者を対象に、ワルラスの一般均衡理論の意義について、ほとんど数学を用いることなく解説した研究書である。当時ドイツ語圏では、歴史学派の支配によってワルラスに代表される「純粋経済学」の意義が貶められてきた。歴史学派の人々は経済現象が国や時代の違いによって異なるという歴史的相対性の立場を取っていたのに対し、「純粋経済学」は政治や倫理その他の非経済的要因を排除した世界で普遍的に妥当する経済法則を解明することを狙いとする。本書は、近年塩野谷祐一の研究『シュンペーター的思考』『シュンペーターの経済観』によれば、シュンペーターが、当時の自然科学者たち（マッハやポアンカレ）の方法論に学びながら、「道具主義」（理論は現実を理解するための汎用可能な道具であり、それ自体は真でも偽でもないという考え方）としての経済学方法論を提示した試みとして読むことができる。

- 『経済発展の理論』 —静態から動態へ—

### Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung (1912)

新古典派「静態理論」の基礎の上に独特の「動態理論」を構築したもので、企業者の「革新（イノベーション）」（新製品、新技術、新市場、新供給源、新組織）が資本主義の原動力であることを主張し、動態理論の観点から経済学の基本認識を一変させた研究書である。「われわれが取り扱おうとしている変化は経済体系の内部から生ずるものであり、それはその体系の均衡点を動かすものであって、しかも新しい均衡点は古い均衡点からの微分的な歩みによっては到達しえないようなものである。郵便馬車をいくら連続的に加えても、それによって決して鉄道をうることはできないであろう」。

シュンペーターの議論は、マルクスが「拡大再生産」の前に「単純再生産」の話から始めた方法と本質的に同じであると言える。シュンペーターは、「経済発展」を「革新」（発展の原因）、「企業者」（発展の担い手）、「銀行信用」（発展の手段）の三つの要因から定義した。利潤は革新による動態現象であり、静態では利子は存在せず、利子率もゼロであると主張した。また市場競争の本質は「革新」に基づく「競争」であって、それを「創造的破壊」と名付けた。シュンペーターは、重要な先行者としてワルラスとマルクスをあげる。ワルラスは経済諸量の相互依存関係の純粋論理を明らかにした一方、マルクスは経済体系の内生的進化のヴィジョンを提示した（利潤獲得に駆り立てられた資本家階級が不断の技術革新とさらなる資本蓄積に励みながら資本主義経済をダイナミックに進行させる過程を分析した）とシュンペーターは評している。

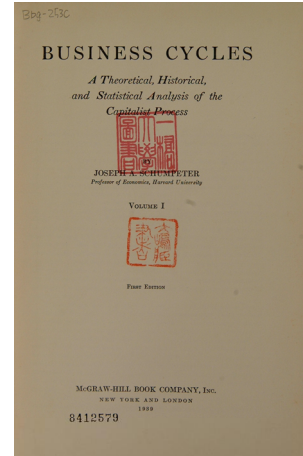


# Works of Schumpeter

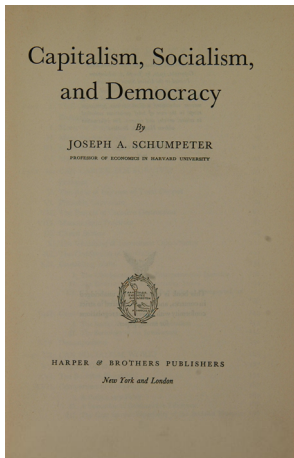
- 『景気循環論』 —資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析—  
Business cycles (1939)

『経済発展の理論』(1912)を歴史と統計で拡充しながら壮大な体系をうち立てる試みで出版された。しかしその出版の時期が悪かった。なぜなら当時は、多くの経済学者が『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936)によるケインズ革命の成果を吸収することに躍起となっていた時期だからである。

本書は、コンドラチェフ循環、ジュグラー循環、キチン循環の3種類の波を枠組みとして、産業活動の興亡を記述しつつも、18世紀後半以降の経済社会過程を、異なった技術パラダイムと社会制度をもつ「産業革命コンドラチェフ」「ブルジョア・コンドラチェフ」「新重商主義コンドラチェフ」の3つの長波によって特徴づけている。



- 『資本主義・社会主義・民主主義』 —資本主義衰退論—  
Capitalism, socialism, and democracy (1942)

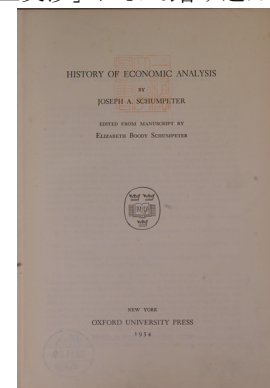


「資本主義の成功がその衰退をもたらす諸要因を作り出す」という著名な命題を展開してインテリ層の関心呼び、シュンペーターの著作の中では最も大衆的な人気を博した。「資本主義」は、革新による「創造的破壊」を原動力とするが、資本主義の発展はそれと両立しない合理性文明を確立して、それが資本主義の野生的・浪漫的な原動力を憔悴させる。「社会主義」は、資本主義の最高の発達段階を意味するものであり、遅れた発達段階にある国が開発戦略として採用する現実の社会主義を指すのではない。第一次世界大戦後、オーストリア社会主義政権の大蔵大臣を務めたが、彼は社会主義者でなく、時期尚早な社会化に反対した。しかし資本主義の変質と崩壊により、究極的に経済学的に管理される社会主義の到来の可能性を推論した。

なおこの書は、資本主義が次第に衰退して社会主義に移行していくという「結論」部分のみが注目されたことや、シュンペーターがその著書を当初は a weekend book (週末休みに手にとる軽い読み物) と呼んだため、特に学問的に重要な貢献をしたものとみなされてこなかった。しかし塩野谷の研究(『シュンペーター的思考』)によって、本書は「経済の領域と非経済の領域との間の長期的な相互交渉」にまで踏み込んだ「経済社会学」の仕事として高く評価されている。

- 『経済分析の歴史』 —遺稿から夫人が編集した大著—  
History of economic analysis (1954)

ギリシャ=ローマの経済学からシュンペーター自身の死去(1950年1月8日)の直前までの経済学の歴史、しかもその理論分析の歴史を渾然たる統一体として描き出す。膨大に遺された原稿を夫人エリザベスが整理した本書は、彼女もまた世を去った翌年の1954年に刊行された。



◎参考文献

- 塩野谷祐一「シュンペーター」．経済学史学会編『経済思想史辞典』東京：丸善，2000，p.195-197  
根井雅弘『シュンペーター』東京：講談社，2006.1.10（講談社学術文庫；1743）  
八木紀一郎「シュンペーターと社会進化論」『ウィーンの経済思想：メンガー兄弟から20世紀へ』  
京都：ミネルヴァ書房，2004.4（Minerva人文・社会科学叢書；92），p.195-217：第4章

# Lectures Given in Japan

## シュンペーターの来日と講演

1931(昭和6)年1月28日(水) 午前十時半、ボン大学教授シュンペーターは東京商科大学兼松講堂の壇上に立ち、「堂を埋めた聴衆を見ていとも満足げに終始愛嬌をふりまき」、「Theoretical apparatus of modern economics (現代経済学の理論的分析装置)」を「流暢な英語で滔々二時間講演」した(『一橋新聞』1931.2.9)。

翌29日(木)は日本工業倶楽部で“The world depression with special reference to the United States of America (世界不況：とくにアメリカ合衆国に言及しながら)”、30日(金)は東京帝国大学で“The theory of the business cycle (景気循環の理論)”(『帝國大學新聞』1931.2.2)と連日の講演後、日光と箱根で休養。2月6日(金)今回の来日の正式の招聘元であった神戸商業大学(現・神戸大学)を訪れ“The present state of international commercial policy (国際通商政策の現状)”、9日(月)“The present state of economics, or on systems, schools, and methods (経済学の現状、あるいは体系・学派・方法について)”、10日(火)“The theory of interest (利子論)”と題する講演を行っている(『神戸商大新聞』1931.2.15)。

講演の合間の2月7日(土)に訪れた京都の印象は記憶に深く刻まれた。ハーヴァードのシュンペーターに学んだ都留重人も次のように思い出を綴っている。「そのときの印象から、かれはこよなく京都を愛し、『源氏物語』をも愛読するようになった。そのあと、まもなくかれは籍をボンからハーヴァードに移したが、たまたまハーヴァードの学生であった私に、「紫式部のような婦人と一晩ゆっくり語りあかしてみたい」と言い、あるいはまた「われわれは、芸術というものをわれわれから疎外して考える。日本人は生活のすみずみにまで芸術を生かしている」と語ったのは、日本訪問の印象がいかに強烈であったかを物語っているように思う(都留重人『近代経済学の群像』)と。

講演の合間の2月7日(土)に訪れた京都の印象は記憶に深く刻まれた。ハーヴァードのシュンペーターに学んだ都留重人も次のように思い出を綴っている。「そのときの印象から、かれはこよなく京都を愛し、『源氏物語』をも愛読するようになった。そのあと、まもなくかれは籍をボンからハーヴァードに移したが、たまたまハーヴァードの学生であった私に、「紫式部のような婦人と一晩ゆっくり語りあかしてみたい」と言い、あるいはまた「われわれは、芸術というものをわれわれから疎外して考える。日本人は生活のすみずみにまで芸術を生かしている」と語ったのは、日本訪問の印象がいかに強烈であったかを物語っているように思う(都留重人『近代経済学の群像』)と。

2月12日(木)はラジオ大阪で演説し、翌13日(金)神戸から乗船して帰国の途に就いた。彼の日本訪問は、中山伊知郎、東畑精一、高田保馬、柴田敬、安井琢磨など、黎明期にあった日本の近代経済学の逸材たちに甚大な影響を及ぼした(根井雅弘『シュンペーター』講談社学術文庫)。

ボン大学時代(1925-1932)のシュンペーターは、長らくドイツ歴史学派の支配によって軽視されてきた純粋経済学の意義を若く有能な研究者たちに伝えた。なお、ボン大学に就任前、東京帝国大学の客員教授への誘いがヨーロッパに滞在中の河合榮治郎からあり(『河合榮治郎全集』第22巻「日記I」)当初これを受けるつもりだったが、後にボン大学が彼を正教授に招聘したので東大行きは実現しなかった。ボン大学在任中、1927年からハーヴァード大学に客員教授として出講。1932年9月にはボン大学を辞任して渡米。当時のハーヴァード大学は経済学部に関する限り、時代遅れのカリキュラムがまだ残っていたが、1930年代ハーヴァード黄金時代の立役者となった(都留重人『近代経済学の群像』)。シュンペーターは多くの弟子を育てた偉大な教師でありながらも、学派を形成しない孤高の経済学者であった(伊東光晴、根井雅弘『シュンペーター』岩波新書)。



▲『一橋新聞』

▼現在の兼松講堂



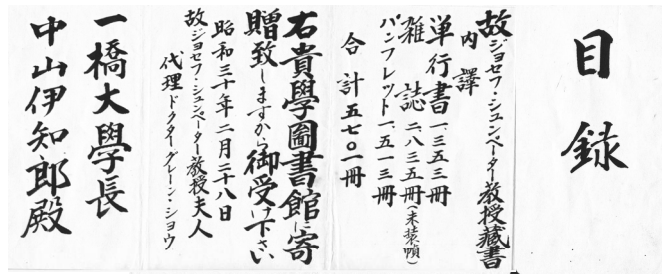
# The Schumpeter Library

## 「シュムペーター文庫」

一橋大学附属図書館は、シュンペーターがハーヴァード大学時代に収集した資料の一部を「シュムペーター文庫」として所蔵している。愛弟子であった中山伊知郎、都留重人が一橋大学に在籍しており、また、シュンペーター夫人エリザベス(1898.8.16-1953.7.17)が日本経済の研究者でもあったことと関連して同夫人の遺言により本学に寄贈されたものである。単行書 1,353 冊、世界各国の経済関係の雑誌(未製本)2,835 冊、小冊子(主として各国の研究者からシュンペーターに贈られた論文の抜刷)1,513 冊、合計 5,701 冊が、1955(昭和 30)年 2 月 28 日、アメリカ大使館文化アタッシュェのグレン・ショーから当時の中山伊知郎学長に手渡された。

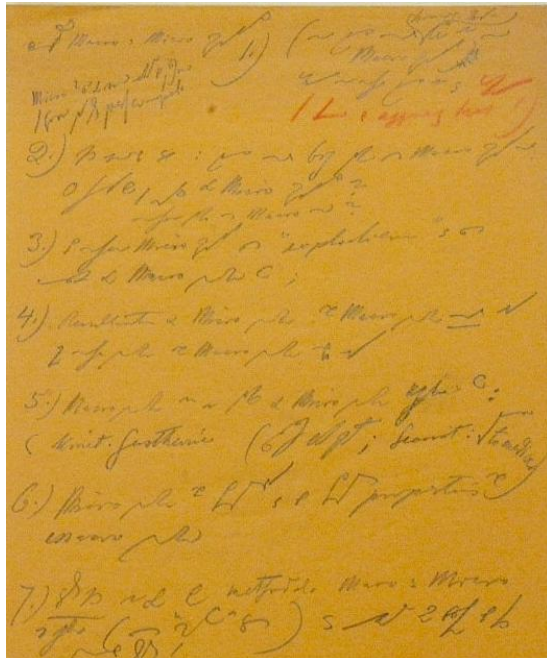
附属図書館は当文庫の整理を行い、文庫目録として 1962 年に The catalogue of Prof.

Schumpeter Library を刊行、追録 Additions to The Schumpeter Library (1967) ともども、現在附属図書館のウェブサイトにて公開している。ドイツでシュンペーターに師事した東畑精一は、この目録に寄稿した「由来記」で、以下のようなエピソードも交えつつ、寄贈の経緯を記している——贈呈式が行われた一橋大学の本館の特別応接室は、昭和 6 年に講演後のシュンペーターを囲んで歓談のひとつきを持った室でもあって、あの時の室の寒さはシュンペーターを少しばかりたじろがせたかもしれない



なかつたが、氏はそれを気にしている当時の教授たちに、「大学は建てものではない」と言っていた。そして例えばイタリアのボロニア大学とかその他の例をひいて、その貧弱な大学の建てもものなかで、いかに見事な研究の成果が挙げられたかを物語ったが、その話など今度の贈呈式の後の歓談の際にも語られたところであった、と。

「シュムペーター文庫」の蔵書には、直筆のメモ類が挿入されていたもの(文庫目録の注記には“J.S.'s notes inserted.”と記載)が多数あり、シュンペーターの思索過程を示す貴重な一次史料といえる。メモ類自体は、挿入されていた蔵書の著者名、書名、出版者、出版年、請求記号およびメモの枚数の記録を採り、中性紙の保存袋に移し替えて貴重資料室に保管している。その多くはオレンジ色の紙片で、ガベルスベルガー(Gabelsberger)式の速記文字(当時としてはドイツ語の速記の代表的な方式だったが、現代では解読できる人材は稀少)で書かれている。



一橋大学附属図書館 Hitotsubashi University Library

平成 19(2007)年 3 月 14 日発行

〒186-8602 東京都国立市中 2 丁目 1 番地

URL: [http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/index\\_Ja.html](http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/index_Ja.html)

Tel: 042-580-8229 (学術情報課学術・企画を担当)

Fax: 042-580-8232 (学術情報課)

※本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館に属します。著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。